留学を終えて

岐阜高等学校　山口　晏奈（マレーシア）

日本に帰ってきてから、一か月が経ちました。まだ一か月しか経っていないのですが、マレーシアでの生活をとても懐かしく感じます。今回の留学に関わり、本当にたくさんの人に支えていただきました。「高校生の留学促進事業」の奨学金を支給していただいたおかげで、貴重な体験ができました。本当にありがとうございます。

マレーシアから帰国して、留学経験を周囲の人々にどのように伝え、自分の今後の生活の中でどのように生かしていくべきかが私にとって現在の課題です。実際、マレーシアでも AFS のボランティアの方に、帰国後どのように留学経験を生かしていくかと聞かれました。その時私は、留学から帰ってからの生活が大切だという重要なことを改めて思い出しました。マレーシアでの経験を経て学んだことや成長した部分を、普段の生活から私の身近の人、家族や友人などに伝え、認めてもらうことは、自分の自信につながります。

今私は、「思いやり」を大切にしています。マレーシアの学校で出会った先生方や友達から、たくさんの「思いやり」をもらいました。皆本当に優しくて、何もわからない私に苛立つことなく、何度同じ質問をしても私が分かるまで辛抱強く丁寧に応えてくれました。日本では、何度も同じことを聞いたり、質問したりしたら迷惑ではないかと、躊躇してしまう人も多いと思います。マレーシアでは、誰でも疑問に思ったことは、遠慮せず口にします。私は最初の頃マレー語が分からなくて、授業中に質問したいと思っても授業を中断させてしまったり、友達が迷惑だと感じたりしたらどうしようと思ってなかなか聞くことができませんでした。そのことについて現地の AFS の人と話した時、「その考え方は日本人らしいね。」と言われました。確かに、日本人特有の他者を気遣う文化が裏目に出てしまっている部分かもしれません。この経験によって日本人の文化を客観的に見る機会を与えられ、異なるものの見方や考え方を学べた気がしました。それ以来、分からないことや言葉に出会ったときには、誰でもいいのですぐに近くの人に聞くようになりました。私が嬉しく思ったのは、マレーシアの先生や友達が私にただ優しかっただけでなく、私がわからないことを尋ねやすい雰囲気を意識的に作ってくれていると感じたことです。彼らは理想的なホスピタリティの精神を持っていると思いました。私はこうした姿勢を素晴らしいと思います。以来、彼らを見習って、日常生活の中でいつも人に優しくするように、そして困っている人が頼りやすいよう、柔らかく話しかけやすい雰囲気でいるように努めています。現在、日本にはたくさんの外国人が在住していますし、これからオリンピックが開催され、来日する外国人の方はさらに増えるでしょう。何か困っている外国人の方たちを見かける機会があるかもしれません。そんな時に、優しく手を差し伸べて、相手の文化を尊重しながら、手助けができたらいいなと思います。

私は留学を通して、異文化理解とは何かを身をもって体験しました。マレーシアはイスラム教やキリスト教や仏教、ヒンドゥー教など様々な宗教が混在し、多様な文化を持っています。そんな状

況でマレーシアの人達は、お互いに他の文化や宗教についてとやかく言うことはありません。なぜなら、彼らはお互いの文化に対して知識があるからです。例えば、イスラムの人達の前で、他の宗教の人達は公共のレストランなどでノンハラルフード（ムスリムが食べられないもの）を食べません。また、ムスリムにとって金曜日は特別なお祈りをする大切な日です。だから金曜日には、ムスリムでない人も含めて午後 1 時ぐらいに従業員がすべて帰宅する職場もあります。また、中華系マレーシア人にとって大切なイベントである旧正月には深夜にも関わらず、町のいたるところで爆竹の音が響きます。そこでもマレー系の人やインド系マレーシア人は、中華系マレーシア人がこの旧正月をとても大切にしている行事と知っており、これを尊重しています。このように、マレーシア人は多文化社会の中で、共生するためにお互い理解し合っています。世界には様々な文化があり、習慣があり、時には理解し難い場合があります。しかしお互いに知識があり、理解しようとする心があれば、他文化に対する批判的姿勢はなくなると私は考えます。

このようにマレーシアで培った異文化理解を生かしたいと考え、岐阜高校で海外研究部に所属して活動しています。海外研究部では、海外と比較しながら日本の文化的思考や人々の振る舞いを客観的に分析し、美点や課題を見つけて話し合ったり、テーマを設定して討論したりしています。また、日本の問題点を改善するために、社会に影響を与えるムーブメントをどう起こせばよいのか、といったことも考えています。

海外研究部が現在取り組んでいるテーマは、「ジェンダー」です。このテーマは、ハワイの高校生が日本の性認識について知った時、なぜ日本は男女差別が激しいのか疑問に思い、日本の高校生の意見が聞きたい意向を示したことがきっかけとなって設定されました。日本とハワイとの間でどんな認識の違いがあるのかをハワイの高校生と話し合うことになり、日本のジェンダーに対する認識や社会の傾向について研究しながら準備に取り組んでいます。これまでの研究で私が興味深いと思ったのは、日本では「男性らしさ」「女性らしさ」に価値が置かれるのに対し、ハワイの高校生は男女の枠を越えた「個人」が重視されることです。この日本人の考え方は男女差別でしょうか。確かにこうした考え方が女性の社会進出を妨げているとも考えられます。しかし反面、日本では「女性らしさ」「男性らしさ」を大切にし、誇りを持っているという考え方もできるのではないでしょうか。例えば、ハイヒールを履くことには女性としての美学があるかもしれません。平安時代には男

性が使う漢字と女性が使う仮名文字がありました。日本には何百年も前から男女の違いに基づく文化があります。ハワイの人たちが男女差別だと思うことのいくつかは日本の伝統的な文化ととらえることもできます。こうした活動で、私が留学で培った異文化に対する理解、多角的なものの考え方が生きていると感じます。以前と比べ、現代の社会が抱える問題やグローバルな問題について深く考えるようになりました。今まで思いつかなかった考え方ができるようになり、視野も広がりました。

グローバルな視点から見ると、日本は異文化に対する理解が他国に対して遅れをとっているように私には思われます。私は日本の教育機関でもっと異文化に触れる機会を設けられるといいと思います。あるマレーシアの友達が、学校で日本についての話を聞いて、興味を持ったと言っていました。このように授業の中で異文化に関する知識を生徒に与え、共有することで生徒の世界観と興味は広がります。オリンピックの開催を間近に控え、日本はますます世界から注目を浴びています。今こそ日本の次世代を担う若者がグローバル化した世界でどのように生きるかについて考えなければならない。そしてこれからの日本を背負っていく私たちは国境という枠を超えた世界を有意義に生きるために異文化理解を深めなければならないと思います。こうした理解こそが恒久的世界平和につながっていくものだと考えます。